

平成25年度 京都市立 西院中学校 後期評価

1 自己評価 【評価日：平成25年10月31日】

評価者：学校評価委員会

】

分野	評価項目	評価指標	分析(成果と課題)	改善策
1 確かな学力	基礎的基本的な知識・技能の習得を諮る授業改善や工夫と指導力の向上	生徒による学習アンケートと教職員の自己評価	小中一貫教育における学びの連続性を活用した研究や公開授業、研究協議の機会を通して生きて働く言語能力の向上を意識した授業展開の構築を進めることができた。「総合」を含めた各学習のねらいを明確にし、体験・体得による知識の定着を図り、また、仮説を立て検証と追究を重ねる探究型活動において、深化する学力の定着を図った。	生きて働く言語の力を高めることに焦点を当てた授業の構築、教師の力をつけることにより活動的で面白いと感じる授業展開を図る。問題解決や論理的思考の姿勢の中から受け身ではなく主体的な学習意欲を喚起する。また、中学生段階で理数教育へ扉を開けておくことを新たな課題とする。
	言語活動を取り入れた授業	公開授業及び事前事後の研究協議		
	総合的な学習の時間の充実	体験を通じた学習による学力の定着、ポスター発表		
2 豊かな心	人権を尊重し自分や他人を大切にする心の育成	道徳・人権教育・総合的な学習の時間 挨拶の励行・規範意識	道徳や人権学習、保育実習やデイケア、フォーラム、韓国姉妹校との交流などを通して自分や他の人の思いやいのちの重みを大切にしなければならないことを理解し、正義や温かい心を重んじる生徒が多いことが感想文からうかがえる。単発でなく、様々な取組・行事とリンクし、他の人や自分が一生懸命に頑張ることを正面から素晴らしいと思える気運ができる。自己有用感とともに自尊感情といきる力、人格の形成につながった。	感じたことを自分の言葉で表現し、他の生徒・大人に発信することを通して反応を受け止め、様々な考え方があることを知り、受けとめることは人間関係構築の大きな基盤でありセオリーであることに気付かせる。左記あらゆる機会を通して、複雑で激変する社会を生き抜く力を身につけさせる。生徒が主体的に友人や地域や社会とのかかわりを深める機会を持たせ、自己有用感を味わわせる。
	規律や決まりを守り楽しい学校生活を築く	生徒会自治活動・韓国修学旅行		
	自己有用感を味わわせる取組	地域行事への積極的な参画		
3 健やかな体	基本的生活習慣の確立	登校指導・アンケートの活用による実態把握	生徒の心の動きをあらゆる場面でつかうとし、得た情報を共有し、心とともに「くらまね」やアンケートなどを活用して理解を図った上で対応策とビジョンを考えている。全員入部制の部活動や体育的行事においても自主活動をメインとし、主体的に活動できるように責任を持たせている。	学力・体力・精神力の低下および生活の乱れにつながるスマートの問題にも着眼し、部活動への参加や正しい食生活で思春期の心身の成長を促す。自然災害や人災、事故などへの判断力を育て、身を守る知恵と身体の充実を図る。
	体力の向上	部活動の充実		
	防災教育	震災防災の日の取組		
	非行防止教育	性教育・安全教育		
4 学校独自の取組	小中一貫教育の推進	小中合同研修会の実施	小中合同の研修や会議を年4回持った。その機会を通して9年間を通した育成を展望した視点を深めた。学校を舞台とした地域行事においても「西院の子は西院で育てる」という意識のもと、韓国の生徒のホームステイなどにも協力を惜しまず、地域の人権風土も醸成できている。堀川高校との連携事業における探究活動でも生徒の多岐にわたる力が向上した。	小中合同研究により校種の違いによる授業への視点が開かれるとともに学びと育ちの連続性を展望した育成ができる。家庭・地域ぐるみで子どもたちの健全育成を図れるように、学校運営協議会や地域の教育力を生かし、そのためにも生徒の様子をどんどん発信する。
	家庭・地域との連携	学校運営協議会・育成連・校園連盟などの共働・共育、堀川高校との連携事業		
	保・幼・高との連携			
	国際理解	異文化理解、国際理解、人権フィールドワーク		

2 学校関係者評価 【評価日：平成26年3月6日】

評価者・組織：学校運営協議会

】

評価結果	改善に向けた支援策
学校教育目標を根幹にした、将来を見据えたキャリア教育の視点に立った進路実現・自己実現や生きる力の育成における指導についての評価は例年通りほぼ半数を占めている。教科の基礎基本の定着においても学習以外の取組による生きる力の取組においても、地域・保護者・学識経験者等の参観の感想から高い評価を得、数値的な学力においても成果は見えている。進学率は100%となり、高校へ行ってからもプレゼン能力の発揮などにつながっていることを伝えられる。しかし、教育上の課題も多々あり、課題解決が図れたとは言えない。しかしながら、地域に胸を借りて実施する保育実習や、震災防災の取組、お年寄りへのデイケア、校区を中心とした職場体験などが地域との接点となり、生徒が自己有用感をバネに日常的に好ましい状態にあることは家庭の理解とともに地域にも高く評価されている。、	左記のように地域と連携した取り組みの下、顔つなぎができており、優しく一生懸命な姿の見せ場も多い。良い評価を受けてはいるが、一小一中という特性の中、幼少時から地域で育まれ支援協力を惜しまないという風土の中で育ったゆえに、逆風に弱く軟弱な面もある。蓄えた学力が生きる力の礎となり、果敢に物事に挑んだり柔軟な対応力を持ったり、セルフコントロール力もつけるべく、社会を生き抜く力の育成を図る。

3 総括・次年度の課題

校内組織の活性化と資質向上に向けて、教職員との話しこみによる共通認識のもと、見逃しのない指導と生徒理解により、今後も地道でねばり強い取り組みを要する。現在の落ち着いた状態の維持とさらなる学力の向上、健全な心身の育成に向けた教師力を高める。地域に開かれた学校づくりの推進において、学校運営協議会や育成連(地生連)やPTA活動により、家庭や地域と連携した取組ができ、生徒の体験的な学びは成果を上げている。様々な活躍の場を設定され、これらのふれあい事業での生徒の姿への評価は高い。コミュニティーの教育力を引き続き有効に生かし、底力のある学力と総合的な人間力の育成を図る。
--